

コロナ禍で過ごしたさまざまな夏休み。武蔵中学では8月28日、2週間のサマープログラムの研究発表会が行われた。これは武蔵学園が2016年から取り組んでいるREDプログラムの一環である。

《REDプログラムとは》

REDプログラムは武蔵学園が掲げる三理想のひとつ「自ら調べ自ら考える力ある人物」を実践する英語のイマージョンプログラムであり、通年で中1生から高1生までの希望者が週2回、放課後にネイティブ講師とともに幅広くサイエンスのさまざまなテーマについて学ぶというものである。REDはResearch（研究）、Essay-writing（まとめ）、Discussion（討論）のサイクルを意味し、2021年9月からは新たな名称のBasic, Intermediate, Completion、そして最上級コースであるAdvanced Programの4つのなかから生徒は科学への興味や英語力によって自分に合ったコースを選ぶことができ、そこで科学の所作や英語のコミュニケーションスキルを身に付けていく仕組みである

（詳細は <https://www.musashigakuen.jp/torikumi/red/gaiyou.html>）

《REDサマープログラム・レポート》

サマープログラムは1年間の総仕上げ的な意味合いもあり、8月の2週間に渡り、江古田キャンパスのみならずフィールドワークや専門分野の講師の先生からのレクチャーなど、様々な活動に取り組む、All in Englishの英語漬けのプログラムである。武蔵の生徒だけでなく、サマーキャンプだけに他校からの参加も呼びかけている。最終日には保護者を招いて、学習の成果を披露するが、今回は「Micro Plastics and Environment」と「Cutting edge Technology and Innovation」の2つのコース（参加者は主に中学2～3年生）のプレゼンテーションを取材した。

・テーマは英語と科学のイマージョン

今回の参加者（男女併せて35名）は2つのコースに分かれ、研究に取り組んだ。一つは“Micro Plastics and Environment”（マイクロプラスチックと環境）を扱うクラス。もうひとつのクラスは“Cutting edge Technology and Innovation”（最先端技術と革新）を調べた。プレゼンテーションでは、それぞれのクラスが4～5グループに分かれて壇上に上がり、各自の研究テーマについて発表した。

ユニークなのはその発表の仕方。個人が自分の研究について話すのではなく、グループのメンバーがそれぞれに質問し合い、互いの研究について討論形式になっているところだ。（REDの'D'、つまりディスカッションを体現している）

・発表方法に仕掛けあり

メンバーが相互に、「君はどんなトピックを選んだの?」、「なぜそのテーマを選んだの?」といった質疑応答を行いながら各自のテーマを紹介し、さらに「難しかったのはどんなところ?」、「調べていて一番驚いたことは?」といった Q&A を繰り返しながらそれぞれのテーマの概略を説明していく。ところが英語で説明するとなると、当然難解な用語も含まれる。そこで、他のメンバーがすかさず、「'biodegradable' (生分解性) とは?」、とか「'food chain' (食物連鎖) について説明してくれる?」と合いの手を入れ、重要語やテーマについては聴き手の理解を得られるような仕掛けがなされていた。また、“What is ~ about?”、“What does ~ mean?”、“Could you explain what ~ means?” といった質問を投げかけながら、相手の説明を引き出すコミュニケーションのスキルがしっかり伝授されていることも感じられた。

また、Yes/No の質問に対しては、答えだけを言うに留まらず、必ず理由を付け加えて説明を深める、といった所作が身につけていることにも感心した。当然ながら丸暗記した原稿をそのまま棒読みするような発表者はおらず、皆んなが時折メモを見ながらでも、身振り手振りを交え、しっかりと質問者とのやりとりを成立させていた。中学 2~3 年生という英語学習歴を考えると、これはかなりのレベルである。恐らくそれを可能にしているのは、日常のトレーニングと経験豊かなコーディネーターや TA (ティーチング・アシスタント) の存在であろう。



・サポートするのはネイティブ TA

それぞれのクラスには全体を指揮するコーディネーターのネイティブ講師がつくが、さ

らに各グループごとに1人ずつ世界各国からのTAが配置されている。生徒と一緒にテーマに関する文献を読んだり、随所にディスカッションを組み入れ、プレゼンテーションスキルを身につけさせたり、また学んだことを平易な英語でまとめる手伝いをしたり、といったきめ細かい指導が背景ににあったことが生徒たちのプレゼンから伝わってきた。

・いま起きていることを実体験



少人数でのコミュニケーション指導だけでも高いイメージ効果を得られるに違いないが、このサマープログラムのさらにユニークな特徴は、「マイクロプラスチック」のクラスでは実際に海岸でのフィールドワークを行ったり、「最先端テクノロジー」クラスはホンダの技術者とともに自動運転車を体験し

たりと、現場の専門家からの直接のインプットである。「いま現場で起きていること」を体感できるからこそ、自分の学びのアウトプットにつながるのだろうと実感した。

・ポスターセッションでの出来事

プレゼンテーションでもっとも難しいのは発表自体ではなく、むしろ質疑応答である。相手の質問の意図を理解し、それに対し当意即妙に英語で応答することは、相当の経験のある学習者でも難しい。今回の研究発表では、ある程度互いの質問事項とそれに対する返答を各自準備して臨んでいたように思えたが、この段階の生徒たちにとっては適切な配慮であると思われる。場数を踏み、少しずつハードルをあげていくことによって、きっと自分の英語で相手との丁々発止のやりとりができるようになるはずだ。それを感じさせてくれたのは、



ポスターセッションの一場面である。

それぞれの発表者は研究内容のレジメをポスター掲示し、見学者の質問に対応するのだが、「最先端技術」チームのメンバーの一人の男子生徒が『中央新幹線（リニアモーターカー）』について調べていた。プレゼンテーションでは東京～大阪間の所要時間について触れていたのので、こんな質問をぶつけてみた。「中国ではすでにリニアが走っているよね。日本のリニア技術は中国のものとは違うのかな？」

決して帰国子女のような流暢な英語ではなかったが、その生徒はハッキリと「違います」と答え、'Superconducting Maglev'の特徴について自分のことばで必死になって説明してくれた。

自分が関心のあるテーマを何とか相手に伝えたい、という姿勢。そしてその手段としての共通言語である英語。このプログラムに参加した生徒たちが得た成果のひとつが、きっとこのことなのだろう。「超電動リニア (Superconducting Maglev)」という単語とともに、そのことをこの生徒から教わった。

『参加を希望する生徒は年々増えています。特に今年は 9 月からの新年度では、各コース定員 25 名なのですが、Basic コースは 30 名近く、そして Intermediate コースには 40 名近くの生徒が受講します。2 コースだけで 70 名というのはかつてない参加者の数です。』RED プログラムの推進役、武蔵学園の国際部長兼国際教育室長の掘越敏明氏は科学を英語で学ぶというコースに惹かれる生徒達の多さに驚いている様子で、コロナ禍の中でも旺盛な好奇心を発揮した生徒たちに拍手を送っていた。

右田邦雄

国公立・私学中高教諭として 35 年英語教育に関わる。主にプレゼンテーションの指導実践に携わる。文科省検定教科書の他、『英語指導のアイデアバンク』、『高校英語教育構造改革論～プロジェクト IF』（共著）など執筆。森上教育研究所後援 NPO 学校支援協議会セミナー「東大入試分析」他の常任講師。